

【事業実績】

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトの 2020 年度の活動は、都市文化を紹介するイベントの開催、文化コミュニティの連携促進と文化資源の調査、コンテンツ制作、人材育成プログラムの開発、プロジェクトの運営とモデル化という 5 事業からなる。本項では、それぞれの活動を「カルナラ！ イベントシリーズ」「コミュニティをつなぐ・情報を伝える(連携と発信)」「文化を可視化する(コンテンツ制作)」「カルチュラル・コミュニケーターを育てる(人材育成)」「プロジェクトを育てる(プロジェクト運営とモデル構築)」と題して報告する。

報告の内容をまとめた報告書「都市のカルチュラル・ナラティブ '20」(日英バイリンガル)は、ウェブサイトで閲覧可能である。また、プロジェクトが制作したコンテンツは、SNS やブログといったオンラインメディアでも積極的に公開している。是非ご覧いただきたい。



SNS アカウント: (Instagram, facebook, twitter/@culnarra)



ブログ: (<https://medium.com/@culnarra.interns>)



報告書

「都市のカルチュラル・ナラティブ' 20」

プロジェクト 01: カルナラ！ イベントシリーズ

「都市のカルチュラル・ナラティブ」は、学術成果の前景化を軸に今昔の文化資源を相互につなぎ、文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)を結像することを目指している。このコンセプトを具体的に表現し社会に届けるための一つの装置が「カルナラ！ イベントシリーズ」だ。プロジェクトメンバーの多様性を活かし、現代美術・寺院・建築・放送・生け花・食・和菓子といった幅広い主題をフィールドに、港区で展開する都市文化をその歴史的・文化的文脈とともに紹介するイベントを企画している。

本年度は、地域文化資源ドキュメンタリー映像上映会「**港画:都市と文化のビデオノート**」(7.18)、重要文化財を含む地域の建築公開イベント「**慶應義塾三田キャンパス 建築プロムナード オンライン ー建築特別公開日**」(11.11, 11.14)、トークイベント「**プロトコルを探るダイアログ:カルチュラル・レジスタンスをめぐる**」(1.22)、トーク・イベント「**文化と集団のアーバン・リサーチ——いま、都市のコミュニティはどうなっているか?**」(1.24)の4つのイベントを開催した。

コロナ禍であり、またオンラインイベントというこれまでにない開催形態にもかかわらず、のべ 546 名の参加者があり、またイベントの記録映像が視聴回数は全体で 1,000 回を超えるなど、地域の文化と、文化をめぐる学術成果を多くの人に伝達しえたと思う。また、オンライン化したことにより、時間・距離の制約がなくなり、地方に在住する方々や、家庭の事情や体調など、さまざまな理由で文化活動から遠ざかっていた方々に、企画への参加機会を提供することができ、文化活動のアクセシビリティについて再考する契機ともなった。



参加者からの声

図書館やミュージアムが保管公開する書籍や資料というモノが人を通して生かされ、そこにそれぞれのドラマもあると感じた。

建築物の目に見えるところの細部だけでなく、歴史の全体像の中に建物を置いての説明で、新しい視点を得る事ができ興味が倍増した。

パンデミック時代ならではの新しい communication tools で沢山の発信をお願いしたい。

オンラインという事で体調や予定に依らず建築や芸術作品を拝見できた。

地方在住で、旅行もままならないので、このような機会に感謝します。

インテリクチュアルな話題を展開できる場として、面白いと感じた。

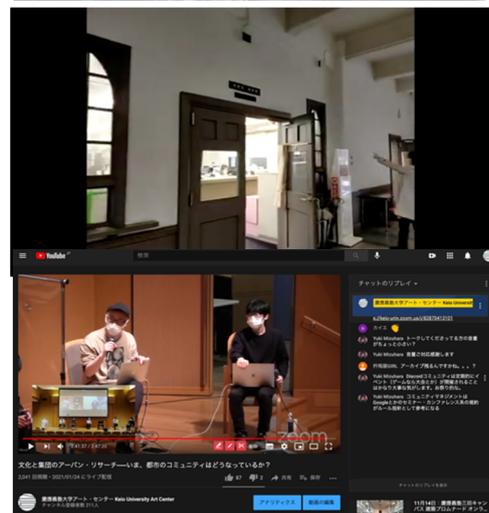
カルチャーに関する問題を言語化して考えてみることは重要だと感じた。

日本及びアジアのコロナ禍での現状の認識、そこででの可能性を求めてのストラグルが何となく分かった。

将来的な未曾有の事態に備え、様々な文化芸術の展開方法、守り方があると思った。

プラットフォーム(多様性)とコミュニティ(心理的な安全)の違いを整理できたこと、同じ組織でそれらを両立させることの難しさを実感できました。そして、相反する多様性と心理的な安全を両立するには、各々を行き来させるのが一つの解決方法であるというのがとても印象に残った。

ディスカッションのモデレートも中継の技術もスムーズで、遠くにいながらこのような質の高いイベントに参加することができて感謝しています。



プロジェクト 02：コミュニティを繋ぐ・情報を伝える（連携と発信）

今年度は、地域で文化活動を展開するコミュニティについての調査と、地域の文化資源に関する調査を行い、報告会を開催した。地域におけるコミュニティについては、社会人向けワークショップ「カルナラ・コレッジ '20」参加者の協力を仰ぎつつ、区の地区ごとに発行されている地域情報紙、ボランティアガイドや街歩き団体の周辺を中心に、文化活動に関わる地域のコミュニティについて調査を行った。地域の文化資源については、文化資源ドキュメンタリー映像のテーマや、都市の再開発と遺跡をテーマとするトークイベントとの関連を念頭におき、区内の遺跡について、とくに 2019 年に発見された鉄道遺構「高輪築堤」を中心に資料調査を行った。

プロジェクト 03: 文化を可視化する（コンテンツ制作）

今年度は、オンラインでの情報提供が中心となることから、ウェブサイトに掲載するテキストの翻訳、またオンライン・イベント等の動画の字幕作成と翻訳を中心にコンテンツ制作を進め、6 種のテキストの翻訳を実施した。また、地域文化資源を紹介する短編ドキュメンタリー映像を 3 件制作した（テーマ:「地域の歴史と新しい生活様式」「都市の風景」「生け花と近代建築」）。

一方で、新型コロナウイルス感染症の影響で、海外からの来訪者を現地で迎えることができなかつたため、昨年度活発に行つた SNS 等を通じた逐次的な情報発信についてはその内容や手法を再考することとなった。



ドキュメンタリー映像「港画」

<https://vimeo.com/showcase/minato-e>

プロジェクト 04：カルチュラル・コミュニケーターを育てる（人材育成）

人材育成プログラムについて、当初は学生などの若年層を対象とした育成プランのみを準備していたが、文化活動の継続が困難な状況下で、ボランティアガイドなど、地域で文化に関わる活動を継続的に行っている社会人に対する働きかけと支援をする必要があると考え、学生対象のワークショップ「六本木イメジャリ」と社会人対象のワークショップ「カルナラ・コレッジ '20」の 2 部構成で実施した。

また、地域における学びを考えるワーキング・グループを 2 種類、のべ 4 回ホストした。一つは、地域文化資源の相互学習 (co-learning) のあり方について検討するミーティング、もう一つは、社会人による継続的な学びを可能にするために、MOOCs (大規模オープンオンラインコース) のデザイン手法を参照するワーキング・グループである。

参加者からの声

クリエイティブなアウトプットの機会が少なくなっていたので貴重な機会となりました。ありがとうございました。

街歩きに参加したことで、自分自身だけでは訪れることのなかつたであろう場所にまで足を運ぶことができ、違った視点を発見できた。

自分の発想を縛りなく展開できて楽しかった。自分自身の興味の軸を再確認し、自分にとって新たなアプローチ手法を学べた。

他の受講生とは、大きなテーマは同じでも興味が異なるので別の視点からのアドバイスが嬉しかった。

文化で街をつくるというお話を伺い、文化が街の中でも重要な役割を担っていることを理解した。

ナラティブなアプローチ法を使って相手を巻き込んでいくアクションを取ってきたい。



プロジェクト 05：プロジェクトを育てる（プロジェクト運営とモデル構築）

本年度は、オンライン・ミーティングやメールでのコミュニケーションをベースに、プロジェクトメンバーとのディスカッションを行い、プロジェクトを運営した。また、外部評価プログラムについて、来年度以降にどのような方法で外部評価を行うか、またその外部評価プログラム自体がどのようにモデル化されるのかを検討した。